

## 仏教心理学入門

織 田 顕 祐

### 一、はじめに

皆さんこんにちは。今、采筆先生から紹介していただきました織田顕祐と言います。今年、仏教学会の会長ということで、今日は皆さんに話をするになりました。仏教学会の会長は、毎年交代交代でやるという役なので、今年はたまたま僕に順番が回ってきてみんなに話をするというわけです。

一年生の1クラスの人達は基礎演習の担当が僕ですから、この間一回目の授業をやりました。それで1クラスの人には僕の名前と顔が重なっていると思うんですが、2クラスの方は今日初めて出会う人もあると思いますが、織田と言います。どうぞよろしく願います。

はじめに歓迎講演ということですから、まず皆さんがこの大谷大学の仏教学科に入ってくださったことを心から歓迎したいと思います。皆さんの中には自己推薦や指定校推薦で面接をした人もありますし、その後の入学前課題のレポートを読ませてもらった人もありますから、初めてではないかもしれませんが、改めて大谷大学のこの仏教学科に入ってくださいって本当によろこそ、という感じですよ。私にもちょうどみなさんと同じ年の娘がいるということを1ク

ラスで話しましたが、その娘の学校のPTAなどに行くと、他のお父さんやお母さんのもっと若いものですから、娘が非常に肩身が狭いという感じでいました。皆さんから見ると、私は皆さんの親御さんのもうちょっと上の、おじいさんではないことを願いますが、ちょっとその下ぐらいの世代の人間です。

僕も昔、今から四十年ぐらい前ですが、皆さんと同じように仏教学科に入学しました。当時同級生は五十人ぐらいいたと思います。僕は愛知県出身ですが、その田舎の高校から京都に出てきてびっくりしました。大谷大学の学風とか仏教学科の先生方とか、先輩達の様子や、その他非常に驚くことが多くて、びっくりしたんです。それで、何を驚いたんだろうと、そういうことがずっと引っかかっています。なぜなんだろう、と考えているうちに、いつのまにか時間が経ってしまつて、今こんな白髪頭になつてしまつたというわけです。ですから僕は、自分が四十年もここにいるという感覚があまりなくて、ついこの間皆さんと同じように、僕が出会つた時の先生の話を聞いている、その時の気持ちとそんなに変わらないんです。正直なところ、その間に四十年も時間があるという実感はあまり無いんです。ただ、鏡を見ると、この向こうにいる白髪頭の人は一体誰なんだ、と時々驚く事があります。だから、気持ちは変わらないんだけど、顔や形は随分変わったなと、ひしひし感じるんですね。そういう世代の人間ですが、たまたま今日は縁をいただいで、皆さんを歓迎する講演をしたいと思ひます。

それで采翠先生から題を出すようにと言われましたので、「仏教心理学入門」という題を出しました。この題は、去年のオープンキャンパスの模擬授業の時に、同じ題を出しました。だから「オープンキャンパスの時と同じだ」と思った人がいるかも知れません。ただオープンキャンパスの時には二十分か三十分くらいしか時間が無かつたものですから、ざつとした話しかできなかったと思ひます。それで白髪頭の変なおじいさんが何か言つたということに終わつていたかも知れません。そうでなければとても嬉しいんですが、仏教学科のコースが今年から変わるもんですから、オープンキャンパスの時はそれを念頭に置いて、新しいコースの中身を少し話そうと思つて、「仏教心理学入門」と

いう題を出しました。今回は、入学された皆さんに話すのですから、もうちょっと突っ込んだ話をしたいと思っています。新しいと言ってもその前の事を知らなければ、何が新しいのか意味が分からないかもしれません。仏教学科はこれまでの四コースを、新たに三コースに改めました。「現代と仏教コース」、「文化美術コース」、それから「仏教思想コース」という風に改めました。ちょっと聞いてみますが、仏教学科のコースが変わった事を知っていた人、手を挙げてくれますか。それでは、前のコースをよく知らないから新しいコースもよく分からないという人、ちょっと手を挙げてくれますか。どちらでもかまわないんですけど、学科として私たちは仏教学科のコースを変えたのです。これまで、インド、チベット、中国、日本というコースだったんですね。それを今回、現代と仏教、それから文化美術、仏教思想という風に三つに変えました。それは一体どうしてなのかということを少しづつ話しながら、今日のテーマに入っていきたいと思っています。

大谷大学は、皆さんも知っているかと思いますが、非常に古い伝統があります。この点は入学式の時に学長先生もちょっと触れていたけれど、江戸時代の寛文五年、一六六五年という、そんな時代から仏教の勉強をしていた所が始まりなのです。最近になってからでも、百年以上の歴史があつて、仏教学科というのは始めからその中心にありました。ですから、大学へ来る人がまだ凄く少ない時代にも、仏教学科はあつたんです。そこでは大体仏教学の研究者というか、学問的な伝統を受け継ぐ人を養成するための学科として始まったもんですから、それがずっと最近まで繋がっていました。ですから仏教学科としてこれまで大学でやってきたのは、どちらかというと、経典の研究とか、歴史の研究とか、語学の研究というような研究中心の学科でした。ところが時代が変わって、もう平成になって二十何年も経ったわけです。大学で学ぼうという人達の動機というか、意欲もだいぶ変わってきました。それで僕たちも皆さんのそういう様々な学びたい意欲に応えたい、ということでコースを改編したのです。みんなに研究者になって下さい、ということではなくて、仏教を手がかりにして、こういう学び方もできます、仏教にはこういう面もあります、

ということがわかるように、学科で学ぶ内容を少しでも皆さんに分かってもらいたいと思つて、このような三つのコースに変えたわけです。

それで、仏教思想コースは、今までと同じように、まず伝統的な經典や論書や語学を学んで、仏教思想とは何であるかということを選びたい人達に選んでもらいたい。

次に現代と仏教コースは、ちよつと説明が必要かも知れませんが。仏教の教えの始まりは非常に古い時代の話ですね。ところが僕たちが生きているのは今現在です。皆さんは二十一世紀の今日を生きているわけですから、その間には時代の移り変わりもあるし、考え方の変化もあります。だから昔の言葉がそのまま通じる面と通じない面があるかもしれない。仏教の考え方ということが、時代を貫いて変わらない価値を持つなら、今の時代の私たちが、仏教を聞くとか学ぶとか知るといふのはどんなことになるのでしょうか。例えば、日本人が英語を学ぶ時のことを考えてみましょう。知らない言葉だから、まず英語を学んで日本語と通訳をするということがありますね。そうしないと、アメリカやヨーロッパの文化が分からない。それと同じように現代の私達と仏教の世界とを、通訳していくというんですか、関係を知つて私達の考え方や行動を見つめなおす手がかりを得たい。そういうことを狙いとして、この現代と仏教コースというのを考えたわけです。

それから、文化美術コースは、次のように考えてもらいたい。今言つたように、そういう古い時代と今の間には当然のこととして歴史があつて、そこには移り変わりがあり人間が生きて活動して色々な物を生み出してきたわけです。その中の特に美術・芸術と言われる面、例えば仏像を刻んだり、寺院を造つたり様々な事を通して、自分達の気持ちを表現してきました。それで今そういう物がたくさん残っているわけですが、そういう物を通して、人はそこに何を感ず、大事なこととして表現しようとしたのか。仏像や寺院などに表現された人間の内面の豊かさを学びたい、そういう事を仏像や寺院や様々な美術や歴史から学ぶことができるのではないかと思うのです。昔と今とその間に三つの

課題を見て、それでこの三つのコースを立てたわけです。

今日は、その中の現代と仏教コースのねらいについて、仏教の考え方と現代の私達がこんな風に重なり合っているということ、資料を通して皆さんに紹介するというか、感じてほしいと思って「仏教心理学入門」という題を出したわけです。それで、資料を一枚ずつ配っていますから、その資料に基づきながら、話を進めていきたいと思っています。

## 二、仏教は自分の内面を知るための鏡である

次に仏教に対する僕の実感を聞いてもらいたいと思います。これは言わなくても良いようなことかと思つて少し迷いました。今僕は五十八歳です。仏教をずーっと学んできて、今どんなイメージでそれに接しているかという、仏教というのは鏡のようなものだなというのが僕の正直な気持ちなんです。ですから、これは分かってくださいとか、それを皆さんに教えようということではなくて、僕はそんな風に今感じているということです。それで鏡のようなものというのはどんなことかという、皆さんも今日ここに来るまでに当然、朝起きてから何度も鏡見てから来たはずです。でもあまりそんな事を意識してはいないと思います。わざわざ「鏡を見るぞ」と思つて見なくても、普通に見るものですね、鏡というものは。朝起きて、最初に鏡を見る人もいると思ふし、学校に行く前にパッと見る人もいると思ふし、何度も何度も見る人がいるかも知れません。言葉では「鏡を見る」と言うんですけど、文字通りに、「鏡を見てきた」訳じゃないですよ。 「鏡を見る」のであれば、そこに掛けてある鏡は、丸いのかどうか、四角いのかどうか、ちよつと汚れてるなということが「鏡を見る」ことなのだけれども、皆さんが毎朝鏡を見るのは、そのような「鏡そのものを見てくる」わけではないですね。そんな人はあんまりいないと思います。鏡屋さんか、鏡に特別の関心がある人ぐらいですね、そういう事に関心があるのは。日本語で「鏡を見る」と言うのだけれども、「鏡」を見てきたわけではないですね。見てきたのは何ですか？鏡に映つた自分の顔を見てきた訳でしょ。自分の髪

の毛の形とか、自分の化粧のノリ具合とか、他にも色々見ると思います。「鏡を見る」という言葉の中には本当に見るものが抜けてます。鏡を通して鏡に映った自分を見てきたんだから、「自分を見てきた」というその言葉が抜けてますよね。だから「鏡を見てきた」「鏡を見てきた」と言っただけで、鏡を見てきたように思っているけれど、本当はそうではない。本当は鏡を見てきたわけではないですね。鏡はどうでもよくて、自分が大事なわけですね。今日これから学校に行くのに、髪の毛が曲がってたらいけないし、せっかとお化粧したのに目に塗るべきものをほつぺたに塗ってたら変な事になってしまいます。そういうことを確かめるために見てきたわけですね。しかし、そういうことはあまりにも当たり前だから「鏡に映った自分を見る」などと改めて言いません。それで、ふと忘れてしまうわけですね。「自分を見た」という事を忘れて、「ああ鏡を見てきたんだな」と思っただけで通り過ぎてしまう。しかしそうではないわけです。僕は目はあまり良くないですけど、学生時代はずっと20でした。三十歳ぐらいまで20でした。20でも30でもいいんですが、目のいい人がじつと見てたら自分の顔が見えてくるかといえは、そんな事は絶対無いですね。だから自分の顔を正しく知るためには必ず、鏡でなくてもいいんですけど、水でもいいし、ガラスでもいいんですけど、何か映す物が要るわけです。そうやってはじめて自分の顔が見られるわけです。それを忘れてしまうと、鏡が無くても自分で自分の顔が分かるんじゃないかと思うけれども、それは思い込みであって事実とは違いますね。

それで顔とか髪型というのは、形があったり色があるものだからまだ分かりやすいけれども、心の中とか、ものごころとか、そういう形の無いものはどうすれば見ることができのでしょうか。そういう自分の考え方とか自分の価値観という形の無いものこそ、自分が一番頼りにしているものではないですか。その一番頼りにしているものが本当に自分でちゃんと分かっているかどうかを知るためには、やはり鏡のようなものが必要なのではないかと思うんです。当たり前のことだけでも、鏡が無ければ自分の顔が分からないように、人間の内面の問題も、鏡のようなものが無いと、分からないのではないかと気がまず一つです。

こういうことをまず、最近改めて大事だなあと思っています。それは何故かと言うと、そういうものが無いと自分の考えでどんな、いいと思つて突つ走つて行くわけです。この今の世の中、つまり現代という世の中も、これは誰が作ったかといえ、皆さんの先輩が作ったわけです。皆さんもそれにあずかって、一緒に作ってきたわけです。ど。その際に、この世の中を悪くしてやろう、と思つて努力してる人はあまりいないと思ふのです。もう、腹が立つから悪くしてやろうと思つて努力してる人はあまりいないと思ふのです。「腹が立つ」ということはあるでしょうが、わざわざ努力して悪くしてやろうとか足を引つ張つてやろうと思つてゐる人はあまりいないと思ふんです。ほとんどの人が良くしようとか、もつと良くしようと思つてやつてるのに、いつの間にか、世の中が變つてきて、例えばはじめの問題だとか、虐待の問題だとか、貧困の問題といった色んな問題が起こつてくるわけです。みんなで良くしようと思つて努力しているのにそういう事が起こつてくるのは一体何故なんだろうかと考えてみなければならぬのではないでしょう。そうしないとこれから先も良くしようと思つて私達が色々努力すればする程、もつともつとひどい世の中になつていくかもしれないという気がするのです。そういう事を今日は考えてみようというわけです。

### 三、資料を読む

それで今日は、この「現代の子育て事情と児童虐待」という資料を出しました。これは以前のオープンキャンパスの時に読んでもらつたものと同じものです。資料①としてレジュメの右側に出しておきました。その前にもう一度、私に氣になつてゐる二つ目の点を確認しておきたいと思ひます。さつきちよつと言いかけたのは次のようなことです。つまり人間は、自分の世の中を悪くしようと思つて一生懸命頑張つてゐる人は一人もいない筈なのに、一生懸命努力して良い世の中を作ろうと思つてやつてきた筈なのに、虐待や差別、貧困というような問題は大きな社会問題となつてクローズアップされています。こうした問題は、僕が子供のころにもあつたのかも知れないけど、今ほど問題にな

ってませんでした。統計的ではありませんがやはり、増えているのではないかと思うのです。それ故、良くしようと思つて、努力しているのに、どんどんそういう問題が起こってくるのは一体なぜなのでしょう。昔と今では人間のタイプが変わつたんだということなら考えようもあるのですが、そういうわけにもいかないと思うのですね。だから、そういう社会的な問題は、一体誰が引き起こすのかと言え、それは私達自身に他ならないわけですから、良くしようと思ひながらそういう事になっていくような私達の内面をよく見極めないといけない、知らなければいけないと思つておきます。

だから、それをレジユメには次のように書いておきました。「虐待や差別、いじめなどの現代の社会的な問題も、それを起こすのは私たち人間自身である、つまり私達の心の活動の結果である」こんな風に言えるのではないかと思ふんですね。それ故、私たち自身の内面、つまり心は一体どうなつてゐるのかということ、これを正しく知らなければいけないのではないか。この点を正しく理解しないと、良くしようと思ひながらもつとひどい世の中になつていつたら大変な事です。それを何とか考えてみたいと思ふんです。それが「現代と仏教」というコースを立ち上げた理由です。これからお話しする仏教心理学は一つの切り口です。社会の問題と私たちの内面のつながりを考えようというコースを考えたその理由の一端をわかつてもらいたいです。今日は、その人間の内面、心の問題が引き起こすでき事を仏教の教えと重ねてみたいと思つて虐待という事をわかりやすく話して下さつてゐる現場の先生の新聞記事を出したわけです。これは毎日新聞の記事ですがちよつと長いので一度私が読んでみます。皆さんも一緒に見てくださいます。出来たら、鉛筆を持って、「あ、ここ大事だな」と気が付いたらちよつと線を引くとか、「ここわからんな」と思ふところは自分で線を引くとかして欲しいです。基礎演習の授業でそういうことをやっていますから、それと同じように一度やつてみてください。それでは読んでみます。一緒に声を出して読んでくれてもいいと思います。



※リポ<sup>®</sup>ジトリ非公開

2012年 1 月31日 毎日新聞京都地方版

こんな文章ですが、どう思いますか。皆さんはまだお母さんになっているわけではないから実感がないかも知れませんが、しかし、こうした話はよく聞くと思えます。一週間新聞を見るとだいたい一回ぐらいは必ず虐待の記事が出ているように思います。それから虐待ではないけれど、先日大津でいじめによって中学生が自殺するという事件もありました。何と言えいいのか、弱いものを排除したり暴力を加えるということがとつても目につくように思います。

それで一体なぜなのかと考えてみる。そうすると、実は知らず知らずのうちに世の中が、少しずつ少しずつ変わってきたことと大きな関係があるらしいということがわかってきます。この点が資料の最初にちょっと書いてありますね。皆さんはどんなところに線を引きましたか？少し聞いてみたいと思います。どくら辺に線引きましたか。(ある女子学生)「子育てはむしろ難しくなっている気がする」というところと、「思い通りにいかないのが人間、中でも赤ちゃんである」というところです。そうですか、そこに注目しましたか。ではあなたはどうですか。(別の学生)「お母さんが安心して子育てできていることが一番の鍵」のところですか。そういう所に線を引きましたか。他にも引きましたか。(別の女子学生)「虐待してしまう母親は、実は、誰よりも助けを求めている人」です。

それぞれの人がそれぞれの考えで線を引いてくれたと思うのですが、僕は、これから仏教学科で学ぶこととして、人間の内面と重ねた時に、注目してほしいところを三番目にまとめておきました。「注意してほしいところ」というところです。それで、最初の段落で、「昔に比べるとはるかに生活は楽になった」と言っていますね。これは皆さんの年齢ではあまりピンと来ないかもしれませんが、僕は、君達ぐらいの時、愛知県の田舎に住んでいました。今では豊田市といって立派な都市になったのですが、四十年前はまだまだ田舎でした。それは豊田市が特別だったのではなくて、日本中ほとんどが今と比べれば田舎だったのです。それで僕の家は貧乏でしたが、今と同じようにやっぱり風呂に入っていました。家にたまたまお風呂があったから。それで、どのようにして風呂に入っていたかというところ、薪というものを燃して風呂をわかしていました。「薪」ってわかりますか？山で木を切ってきたり、いらなくなった柱な

どをのこぎりで切って、「薪わり」という包丁のでかいようなもので適当に割って、それを更に細かく割るのです。新聞紙に火つけて、その細く割った木に火が移ります。そうやって、風呂釜と言うものの中で木を燃すのです。このように、新聞紙に火つけて細くした木をちよつとずつ入れながら、木に火をつけて、だんだん太いやつに火が移ってくもんだから、それでお風呂が沸くという、ちよつと考えられないかもしれないけども、僕はそれを仕事でやっていました。小学生の後半ぐらいからだいたい高校生ぐらいまで、僕はその仕事を二日に一回ぐらいしていました。そのように木を細かく割って、夕方になったら新聞紙に火をつけて、それで見てないとすぐに火が消えてしまいますから、十分に一回ぐらいいは、気をつけて燃えてるかどうか見に行くのです。薪を足しては風呂が沸くまでずっと見てるわけです。だから、風呂をわかすのはとてもめんどくさいんです。それで父親が入ってきて「ちよつとぬるいぞ」と言うと、また行つて、その細い木に火つけて同じことをくり返すわけです。そんな風呂でしたから、僕は今でもそれなりに火を扱うことができます。それが、今どうなったかという、僕の実家もさすがに、ちよつと便利になりました。その後プロパンガスになり、ちよつと詮をひねるとシュツと火が点いて、ブワーっとお風呂が沸くようになりました。それですごく便利になったわけですね。それで僕は少し外で遊ぶ時間ができたんですが、それまでは、お風呂を沸かすのが僕の仕事でしたから、夕方五時くらいからずーっと八時くらいまでお風呂の釜の前でずっと待つてなければなりません。だからテレビをみる時間なんかありません、テレビも勿論無かつたけれどね。それで、ガス風呂になってすごく便利になったと思います。それが、最近はどうですか。もうガスをひねったりもしないでしょ。皆さんの家にあるお風呂がどんな風呂か僕は知らないけれども、僕が京都で今住んでいる家のお風呂は、「自動」というボタンをポンと押すともうそれでサーっとお風呂が沸きます。それで41度なら41度と決めておくと、もう電気を切るまでずっと41度です。これが便利になったということですね。

それから、電話もやはりそうです。僕の実家には電話はありませんでした。それで電話を入れるためにどうしたか

と言えば、広い国道から電話線引いてくるわけです。電信柱を4本ぐらい建てて、電線を引いて電話が来たのです。すると村中で大騒ぎになって、「電話が来た」と言っつて、大騒ぎになりました。それでその頃の私の仕事は何かと言えば、村の中の「何とかさん呼んでください」という電話がかかってくると、呼び出し電話と言うんですが、「佐藤さんの花子ちゃん呼んでください」と電話が掛かってくると、ダーツと走って行って「花子さんに電話です」と言っつて、花子さんと二人で走っつて帰っつてくる、こんな事を一日に何回もやっつていました。だからとてもめんどくさいわけです。便利になっつたのだけれど、用事は増えたわけです。その代わり、お菓子などをもらう事も多っつたです。今はどうかと言えば、もうみんな携帯です。この間聞いたところによると、単なる携帯は「ガラケー」というのだそうです。もう、呼び出しなど行かなくても、鞆から出してサツとやっつたら友達と話ができる。これが便利になっつたということです。

だから便利になっつたということは、何と言えばいいか、自分にとっつては、思い通りになるといふこと、都合が良くなっつたわけです。そうやっつて、あらゆる生活がどんどん快適になっつてきているわけです。これはその中にいるとわからないけれど、僕みたいに長く生きて、五十年前と比べると、余程変わったわけです。その代わり、昔はやることと言っつてはいっつぱいあっつたから、忙しかっつたけれど、暇で困るといふことはありませんでした。それから、そのようにして走っつて行く用事がいっつぱいあっつたから、隣のおばさんにおやつを貰うとか、そういうこともしよっつちゅうありました。今携帯電話になっつて、電話でおやつを貰うことはできません。そうやっつて生活の仕方がどんどん変わっつてきているわけです。これが便利になっつたということです。便利になっつたということを一言で言っつたとすれば、あらゆること自分の思う通りにできっつつあるようになってきたということですね。

そうすると昔の僕たちのように、多くのことが思い通りにならなくてめんどくさい生活だから、ちよっつとでも思い通りのことがあっつたらすぐ嬉しいわけです。たとえ一っつても、例えば電話で呼び出しに行っつてそこでお菓子を貰っ

たということがすごく嬉しいわけです。だから、今となってはしんどいことは全部忘れて、嬉しかったことがかりが思い出されます。今はどうなったかといえば、色んな事が思い通りになったら、ちょっとしたことでも思い通りにならないとそれで腹が立つてしまう、そういうことになるでしょう。どうしてもそうなりますね。それでこの定本さんはこう言っているわけです。あらゆる事が便利になって豊かになって、快適になると、最後に何が残るかということ、一番思い通りにならないのが人間自身だと言っているのです。その通りです、人の気持ちというものは自分でも全くコントロール出来ませんね。好きになりたいと思っただけでもないし、好きになってももらいたいと思っただけでもらえるわけでもありません。自分の都合のいいように人の気持ちを感じたりすることなど到底出来ません。だから色々なことが思い通りになってきて、思う通りの生活ができるようになってくると、一番思い通りにならないのは何かといたら、人間のそのものだ、その中でも赤ちゃんだと言うわけです。まだ大人には理屈が通るけれど、赤ちゃんには全く理屈が通りません。赤ちゃん中心で生きている。そういうことに気付かず大人が自分の考えで赤ちゃんに触れるとどうなるでしょうか。こちらの都合なんかお構いなしだと、書かれていますね。

その上、今では核家族という問題もあります。赤ちゃんと接する時に、隣に昔子育てした人がいて、「赤ん坊というのは元々そういうもんだよ」と教えてくれればそういうこともわかります。しかし今は何で情報を得るかと言えばインターネットやテレビや本ですね。そしたらその本の通りにならないとか、情報通りにならないという事はしょっちゅうあります。私も三人の子供に恵まれましたけど、三人とも全くタイプが違います。お姉ちゃんのやってたことと妹のやってることは全く違います。だから、本などで子育ての秘訣を知ろうと思ってもこれは不可能です。もしも本の通りにならないと思って、それが悩みになったらもう悩みばかりで、悩みしかないようなものです。だから、ここに書かれてあるように、「子育てというのは本を読んでもわからない。経験がものを言う世界だ」ということです。経験がないから困るわけです。それが現代社会では情報というか、知識というか、そういうものがどンドン

どん向こうからやって来るわけです。あたかもそれが正しいことであるかのような顔をして、自立した形でやって来る。そうすると、こちらにはそれを判断する根拠がありませんから、食い違いが悩みとなってどんどん拡大していくことになります。そういうことが起りえますね。

そういう事を通して、資料の左側の方見てください。Ⅲのところですよ。「右の資料①を読む」というところですね。それで、「生活ははるかに楽になった」とあります。「便利」、「思い通り」、というところを太字で書いておきました。どうしても私達は、便利な方がいいし、楽になりたいから、それを目標にしてどんどん努力して、今の便利な世の中ができたわけです。便利になるということは、決して悪いことではありませんが、その一方でどうなったかということ、あらゆるものが思い通りになると思ってたやってきて、それなりに便利になったのだけれど、それでも思い通りにならないものに出会ってしまうということになりますね。大抵のことが思い通りになってきて、思い通りにならないことに出会うとどうなるかと言えば、ちよつとしたことに腹が立つようになるのではないですか。不慣れな中では何でもなかったことが、便利の中では腹立ちの原因となる。だから、これからの世の中は、ますます腹の立つ人、怒っている人が増えていくんじゃないかなと僕は思います。もつともつと思いつりになればなるほど、ちよつとしたことに腹が立つようになりますから、今よりも腹の立っている人が増えていくんじゃないかと思えます。一昨日ですか、爆弾事件がありました。ああいう事件の動機は一体何だろうとやっぱりに気になります。何かちよつとしたこと、例えば赤ちゃんが泣いたということは、一昔前なら当たり前で済んだところですよ。それが今ではそうならなくなってきたわけです。ちよつとずつちよつとずつですが知らない間に変わってきたわけですね。諸君にはまだ、赤ちゃんの話はピンと来ないかもしれないけれども、人間関係とか、色々なところにそういう事が表れているんじゃないかと思うんです。友達と付き合うといった場合に、例えばゲームをやるように友達と付き合うことは出来ないわけですね。ゲームだつたらリセットできるし、好きな時にやりたいところだけをやるけれど、友達関係はリセットもできないし、何という

か、どろどろした、生々しいものです。そういうものはやっぱり面倒くさくて、段々段々しんどくなってくる、そういうことがあり得るんじゃないかと思うんですね。それで、「右の資料の①を読む」というところを見てほしいんですが、そういう「楽になった」、「便利」、「思い通り」ということを、私達は望むわけです。大勢の人達と一緒に生活することは、個人の思い通りにはならないし、面倒なことも多いです。それで一人の方が都合いいということになって、段々と核家族が進み、個人化が進んでいるのでしょうか。そのようにして段々と世の中の都合で、暮らしぶりが変わってきたわけです。それで、一番最後のところにまとめておきましたけれども、この楽とか便利とか思い通りということが、この世の中でどんな風に動いているかというところ、まだまだ不十分で、もつと楽に、もつと便利に、もつと快適にという風になっているんだと思うんです。電話はもつと速く、とかね。電話はもつと、色んな事が便利にできるよという具合にどんどん変化している。

それはそれで悪い事ではないと思うんですが、その一方で何か大事なことを忘れてしまったら、それに振り回されてしまうのではないかと思うんですね。大事なことは何かというと、一つは、便利になればなるほど、ちよつとした不便な事に腹が立つてくるということ。思い通りになればなるほど、ほんのちよつとしたことに腹が立つてくるということ。結果的にどうしてもそういうことになるのだけれども、その自分の内面のことがうまく整理ができない、理解ができないと、こんなことになっていくのじゃないかと思うんです。そういうことが、今日言いたいことなんです。一つはこの、私達の現代事情と言うか、世の中の様々な問題、例えば虐待とかいじめなどが、時代の課題として増えているように思うと、この定本さんが言っています、僕もそんな感じがするのです。それでなぜこんなことになるかということを考えてみると、私たち人間の内面が持っている課題、つまり思い通りになればなるほど、快適になればなるほど、人間関係がうまくいかなくなるという、そんな事実があるのではないかと思うんです。便利になればなるほどうまくいかなくなるんじゃないやなくて、なればなるほど大事なことを忘れるとうまくいかなくなるということ

ですよ。便利になることが悪いと言うんじゃないですね。便利になること自体は悪いのではないけれど、そのことにどんな裏の面があるのかを忘れてしまうと大変なことになると言いたいわけです。

#### 四、これらを理解するためのブツダの教え

それで、それを理解するためのブツダの教えということで、次にIVへいきますが、最初に『スッタニパータ』という経典の文章を引用しています。その中に、ブツダのこんな言葉があります。

「世の中で〈快〉〈不快〉と称するものに依つて、欲望が起こる。」「〔スッタニパータ〕867

日本語だからわかりますね。「世の中で快・不快と称するものによつて欲望が起こる」これはブツダの言葉ですが、どういうことを言っているのか少し考えてみましょう。まず「快」と言うのは「都合がいい」ということですね。

「思い通り」になるということでしょう。すると「不快」は思い通りにならないことです。すると、思い通りのものはもっと増やしたいし、思い通りにならないものは排除したい、そういう気持ちをはたきますね。だからこのようにして、排除したいのかもっともつと手に入れたい、という形で欲望が起こるということです。これは私達の行動の原理のようなものです。ブツダが言う所は、そういう、「もつともつ」という気持ちを私たちが心の奥に秘めているということですよ。それを別の言葉で言うと、「貪欲(とんよく)」と言います。これは、さつきも誰かが言っていたけれど、「とんよく」ではなくて、仏教語の時には「とんよく」と発音します。ブツダの教えによれば、人間の中には深いところにそういう、もつと便利にもつと便利に、そして不快なもの排除したいという無意識のような心のはたらきがあつて、それに基づいて人間は行動している。これが先ほどの、子育て事情の中に別の言葉で書かれてあつたことです。資料には「わけもなくむさぼること」と書いておきました。つまり、都合のいいものもつと増やしたいし、悪いものは排除したいという気持ちをはたらいて行動を起こすわけけれども、そうすると、都合のいいものが



手に入らなければ腹が立つ。都合の悪いものがやって来れば腹が立つということになります。

そうやって益々腹が立つようになる、これを仏教の言葉で言うると、「瞋恚（しんに）」と言います。「腹が立つ」ということは怒りとか暴力というふうにも考えられると思います。だから、僕は心配しているのですが、これからの世の中は、もっともつと怒っている人が増えていくのではないかと思うわけです。今でもかなり増えてきたような気がするのですが。この前も、私はあるところでこんな人に出会いました。何があつたか知らないけれど、空に向かって怒っている人がいました。「なんでこんな天気なんだー」と言つて怒っている人がいました。僕は近寄つて、「君どうしたの?」と聞きたくなつたのですが、一応止めました。そういう人が道を歩いてました。だから人の都合を中心に物事を見るならば、天気さえも思い通りにしたくなるでしょう。天気が良いとか悪いと言いますね。今日は晴れていますが、これが良い天気か悪いかは、その人その人の都合でしょ?もし、明日田植えをしようと思つて田んぼに水がなくて、こんなに晴れてたら今日は天気が悪いね、となります。だから、良いも悪いも一人ひとりの都合で決めていくわけですね。そのようにして、あらゆることを思い通りにしたいという気持ちが底にあつて、そうならないものを排除していききたいということ、ブツダの言葉で「快と不快と称するもの」と言うのです。そこに人間のひとつの行動の原理のようなものがある。そしてそれを別の仏教語になおすと、「貪欲」「瞋恚」と言うのです。わけもなく、もつともつと進んでいく心のはたらき。そして、思い通りにならないと腹が立つという心のはたらき。

そして先程の空に向かって怒つてる人の例を見ると、その人は空が悪いと思つてるわけですね。「なんでこんな天気なんだ!おまえ、こんな天気だから俺が腹が立つじゃないか」と、思つていたら大きな間違いですね。空に向かって腹立ててもどうしようもないですね。これは、自分が思い通りにやつていきたいという気持ちがあつて、そこから怒りの気持ちが起こってくるわけですから、その怒りの本当の原因を知らないと、空回りしてしまいますね。そういう本当の原因を知らないような、人間の姿をブツダは「愚癡（ぐち）」と言うのです。物事の道理がわかつて

いないことを「愚癡」と言う。それで、この「貪欲」「瞋恚」「愚癡」の三つを特に「三毒煩惱」と言っています。

これはブツダの言葉ですが、人間の内面には、無意識にこのような面があるというわけです。だから教えられなければ、僕達はずっともつとということをごんごんごんごんと追究していくことしか知らない者ですね。そうすると今以上に、腹が立つ人間になっていくかもしれません。しかし、このようにブツダの言葉を通して、自分の内面を教えられると、ああ自分の中にはそういう面があるということがわかり、では本当の原因はどこにあるのだろうか、と考える目が生まれてきますね。そうやって自分の行動や考えを、正しく知っていく、正すことができるのではないかと思うのです。

## 五、仏教学科で何を学ぶか

最初にも言いましたが、今日は、ブツダの言葉を三つ、貪瞋癡、それから『スッタニパータ』という経典の言葉、「世の中で快と不快と称するものによつて欲望が起こる」の四つだけですが、この四つからでも、自分の普段の考え方や行動を、見直したり考え直したりする手がかりがありますね。この他にも沢山の大切な言葉があります。ですから、これから仏教学科で、経典や様々な物事を通して学んでいくのは、「自分の内面」とか「自分の考え」なのです。さつきも誰かが言っていたけれど、「自分がどうして生きているんだ」というような深い問いなのです。それから、言葉にもならないようなモヤモヤしたような気持ちとか、そういうものが私達の内面にはたくさんあります。そういう捉えにくいようなものが詰まっています。それについて、言葉を学び、意味を知って、自分そのものを理解していく、こうした表現できないような自分のモヤモヤしたものでも、言葉に出会おうと整理ができるかもしれません。この定本さんの資料の中には、「貪瞋癡」などという言葉は書いてないけれども、今言ったように「貪瞋癡」という概念から

見れば、どうして人間はこんな風になるのかということをよく理解できると思うんですね。そうやって自分自身と、この現代の世の中を正しく知っていく。何というか、行動の原理とか自分の内面ということを正しく知っていく、これが仏教学科の目指す勉強なのです。ですから、仏教を学ぶようだけでも、仏教を通して自分を学んでいく、鏡を通して自分をみるようにね。自分のことをわかっていく。こういうことが仏教学科での勉強の意味なのです。そして、そういう視点に立つて皆さんが正しく将来に向って生きていってほしい。こういうことを、一緒にやっていきたいと思っているわけです。それで最後に、改めて、「仏教は人の内面を知るための鏡のようなもの」だと改めて書いておきました。もう一回言いますが、「鏡」というのはそれ自体が大事なものではなくて、それを見て、自分を知ることが大事なんだということです。仏教学科で学ぶというのは、これと同じような意味を持っていますよと言いたいのです。そういうことを今日は「仏教心理学入門」というテーマで皆さんに話したかったです。時間がもうあまりありませんので、ここまでにさせてもらいたいと思います。どうも、静かに聞いてくれてありがとうございます。

(本稿は、二〇一三年四月十八日(木)に尋源講堂で行なわれた講演を加筆修正したものである。)